

請負業者負擔の輕重

會員工學士野澤房敬

請負工事に對し、當業者の作成する工費の算定法に一本積、單價積の二種あり。一本積とは、工事全部を總括算用する方法にして、單價積とは、費目を別々單價を定めて算用する方法とす。其孰れか利便なるやは、當該工事の複雜なると、單純なるに因り、一概に律し難しと雖も、唯だ其取扱として殊に起業者側の立場より之を見んか、一本積を以て請負はしむる時は、追加工事に對し意外の高價となる事あり、又設計變更を爲す場合、追加契約を要し、再び價格見積書を徵せざる可らずる事ありて、總て増工事を要する場合、請負業者の提議を心ならずも承認せざるべからざる事多し。加之請負に附したる工事にして其一部分不必要に歸し、施工範圍を收縮したりと雖も、工費は契約通り全額を支拂はざる可らず、之れに反し單價積にて請負はしめんか、工事各費目に付内諭明細書を提出するを以て、工費多額に上ると見て、或部分の工事を削減する場合を始めとし、工事の出來高に因り、仕拂金を増減する場合、設計變更等にて増工事を爲す場合、又は材料の變更を爲さんとする場合に於ても、其差替等利便寡からず。依是觀之ば、單價積は一本積に比し概して長所多きものゝ如し、然りと雖も見積の調製、工費の算定よりも、起業者として注意を拂ふ可きは當業者の人物とす。從來の請負工事中、起業者としては理想的竣工を成さしむる能はず、一方請負業者亦甚だ利益を獲得したりとも覺へず、兩々不足不滿の裡に工事の受授を終了したもの渺からざるは、要するに人物の選擇を等閑に附したる結果には非ざるなきか。從來の當業者には人物技倅俱に下級に屬するもの多く、見積り亦誤算あるを免れず、偶々有利の工事なりと認むる時は、幸に事なきを得るも、若し失策せりと氣付く時は、所有手段方法を講じて、施工の良否を顧みず、唯だ一に損害を免かれん事を是れ努む。然るに一方起業者としては、個中の消息を解せず、契約の金額を以て良好の竣工を期待す、是に於てか相互相背馳し、遂に如上の結果を釀成す、亦當然の歸結と謂ふ可き也。所謂請負工事なる誹を受く、由來當業界の片務的に其責任を問はるゝを慣例とするも、仔細に調査する時は、起業者亦其責を分たざる可らざる、點なきに非ざる可し。若し是れが學識あり經驗あり且名譽を重んずる、

月十年八正大

現代有數の請負業者ならんか、其提出せる見積に甚だしき誤謬の之れ無きは勿論、萬一之れ有の結果、損失を生ずる場合ありとするも、工事に影響を及ぼすが如き不始末は、萬なかる可く、隨つて必ず起業者の意思に辜負せず、工事を竣成せしむる事と信す。去れば既往は咎めず將來に於て、工事を請負に附せんと欲する者は、單に工費の低廉を求むるに偏せず、當業者の何人なるやを確め、所謂人物本位にて、工事を請負はしむるを以て、得策と謂はざる可らず。幸ひに鄙見の採用さるゝ曉に達せんか、從來の如き打算外なる低廉の工費を以て、請負はしめ得るが如き事は、絶對に之れ無しとするも、同時に從來の如く、不完全なる施工の爲に、苦惱せしめるゝが如き事も亦、萬無かる可し。斯の如くにして良好の成績を齎さざる工事は、先づ以て之れあらざる可し。若し又今回の如く、物價勞銀暴騰の爲め不慮の災厄に遭遇し、補助を起業者に仰がざる可らざる秋と雖も、是等信用ある當業者の要請たる當然の範圍に止り、亦た彼の下級當業者の奇貨居く可」として、宛ら貪るが如き、斯る賤劣の舉行は、彼等としては斷じて之れ無きと信す。

此信用ある當業者に取りても、一様に誤解を被り、尠からず迷惑を感するは、所謂請負普請なりとの非難を受くるが如くに、當業者の利益なる者を針小棒大に認めたる事とす。玉石混淆を免れざる現代の當業者中には、所謂請負普請的粗雑なる工事を敢てする者の介在すると同様、常に莫大の利益を獲得する者亦之れ無きにあらざる可し、然りと雖も責任を重じ眞面目に其業務に従事する所謂信用ある當業者に至つては、或は利益を見る事あり或は損失を蒙る事あり、常に其得喪あるを免かれざるは、世上一般の營業者と何等異なる處なし、殊に即今之の如き諸物價勞銀の昂騰に際會せんか、唯だ損失に加ふるに損失を以てするのみ、復た利益等あるなし。實に慘憺たるものあり、而かも彼等は多く隠忍して訴ふる事を取てせず、爲に却つて常に莫大なる利益あるものと誤解せらるゝ也。乞ふ試みに左記數項を看よ。

(一)競争入札に依る多大の損失、現時の競争入札法に依り、請負業者が工事の見積をなし、若し該工事を得ざる場合、其蒙る損失は多大なるものあり。試みに大起業者たる鐵道院の建設工事に就き説明せん、其一工事に關する入札者たる、多きときは十五六名、少きも五六名を下らず、而して落札者は一人にして、爾餘は皆見積倒れとなる者也。各人の見積に關する費用は一回平均四百圓餘を要し、之に下請人等の費用を合算するとさは、裕に七百圓餘となる可し、加之請負業者幹部が、見積

書調成の爲め費す時日は數日に亘り、之を金高に換算する時は容易ならざる金額に達す可し、去れば一人一回の入札に要する總費額七百圓とせしは、十二分内輪に見積りたる考へ也。

例へば茲に指名入札者の數を五十名、一ヶ年入札執行の工事數を二十五工區。是れが一工區の平均工費を四拾萬圓と假定するときは、總工事費は壹千萬圓となる可し。而して一入札に付指名者八人、見積に關し實地踏査の旅費、其他一切の費用を一工事一人平均四百圓とすれば、一入札毎に金三千二百圓、即ち廿五度の入札には金八萬圓の費消となる、是れが一人當り金壹千六百圓也。指名入札者五十人の内、十五人を落札者とすれば、殘餘三十五人の費消額は金五萬六千圓是れに下請人等の損失四萬二千圓を加ふる時は、實に金九萬八千圓に上る之れ全く損失に歸しつゝあるものとす。此損失金九萬八千圓なるものは、總工事費金一千萬圓に對し殆んど其一分に該當す。假りに落札者の收得す可き利益を請負金額に對する平均五分とすれば、此入札價格見積調査に費消する金額は、決して輕視す可きに非ず、況んや落札し得ざる入札者の費消金は、全く不生產的徒費に終る。是等は要するに競争入札に伴ふ通弊なりと思考す、而かも法規の改廢は容易の業に非ずとし、此儘是等弊害を防遏せんとするか、復た運用の途なきに非ず、彼の入札者の指名數を、出來得る限り狹隘の範圍に局限する等、必ず効果ある可く、且つ至難の方法には非ざるものと信す。

(二)勞銀物價の騰貴に基因する負擔、大正六年以來物價勞銀騰貴の激烈なる、先づ物價の標準とも可見米價の一升二十五錢なりしものが、既に其倍額五十錢となり、今尙ほ此高價を持續せるを見て知る可く、稅金、附加稅の如きに至る迄、一つとして増加せざるものあるなし、而かも是等は一般的にして、單り當業者のみに局限するに非ずと雖も、茲に當業者の殊に負擔を重からしむるのは、業務上其一大要素たる可き勞銀と、續て材料價格の騰貴なりとす。勞銀は爾來急激に倍加し、而かも時間外の操業を厭ふ而已ならず、所要員數を得る極めて困難となり、已むなく適否を論せず、得るに任して是を雇傭するに至る。材料も亦其價格從前に倍加し、是亦所要員數を得るに困難を加へたり。是を以て勞銀と材料費のみにて、請負金額の約四分の三を占むる業務に有りては、思半に過ぐるものあらん。而かも物價勞銀騰貴に於ける請負工事ならんか、時價相當の採算あるを以て、甚だしき困難はなしとするも、其以前の工事にして尙ほ繼續施行のものならんか、斯く倍額以上の騰

月十年八正大

貴率を示めせる今日、其負擔の重大なる、實に耐ふ可らざるものある可し。而已ならず當業者をして苦しましむる今一事は勞働者の時間外操業を厭ふ即是とす。其何人と雖も、鐵道建設工事に關係を有する請負業者としては、毎日少くも四五百人の勞働者を使役せざるはなし、是等勞働者の作業時間たる、戰前においては大抵日出前より日没後まで、一日大抵十四五時間作業するを以て一般の慣例としたり。然るに戰後の今日に於ては、官公衙の出退時刻に對し、其前後に多少の延長をなしたる程度を其作業時間とす。而かも晝間普通官吏よりも長く休憩時間を取るを以て、實際の勞働時間は一日僅に七八時間を出てす、是を以て勞銀の騰貴と反比例に、工程能率の低下する多大なるものあり。今は等利害關係を、數字を以て示さんが乃ち左の如し。

大正五年度物價に對する今日の騰貴率

勞銀の騰貴	十割以上十五割
勞働能率の低下	三割以上四割半
材料の騰貴	十割以上二十割
諸税増加	三割乃至五割

勞働者にして能率の上昇せんか、其賃銀の騰貴又甚だ問ふ可きに非ず、然るに今日としては、前述の如く時間外操業を厭ふの結果、賃銀の騰貴に反比例して、其勞働能率の低下を來たしたるは、彼此採算して實に多大の不足を當業者に於て負擔しつゝあるものとす。尙ほ大正六年前後に獲得したる工事にして、今日迄に其缺損を蒙れる當業界の狀況を算式に示すときは左の如し。

是は金四十萬圓にて保證金を要せざる貳ヶ年繼續工事を請負ひたるものと假定し、之に要する放資額を金拾萬圓と見積り計算したるものとす。

依是觀之ば、勞銀材料費にして、著しき變化なき時に於て、漸く五分の利益を得るのみ。是を以て若し二割五分の勝貴あらんか、忽ち五萬五千圓の缺損となり、即ち投資金の半額以上を失ひ。五割の勝貴に遭遇せんか、資金は全部消滅したる上尙ほ貳萬八千圓の缺損を生ずるものとす。然るを況んや一昨年來の勝貴たる、五割十割と勝貴し來たり、既に十五割二十割と謂ふが如き、前代未聞の騰貴を現示し、而して今尙其狀態を持続す、去れば大正六年前後より繼續せる工事の損失や、實に思ふ可きものあり。即今の如き困難の秋に際すと雖も、當業者は依然平常の如く毎月の工事出來高金額の内より、其十分の一に該當する金員を、起業者に保留され、竣工後に到らずんば其支拂を受くる能はざるものとす。尙ほ此他從業者の職務

普通の場合	工費支拂額	5% 20,000	¥ 300,000
	10% 40,000	5% 20,000	80,000
	總支出	總支出	¥ 380,000
	利 益	利 益	20,000
	請負高	請負高	¥ 400,000
物價勞銀二割五分合	工事支拂額	5% 3,000	¥ 300,000
	六ヶ月後物價勞銀25%騰貴シタリト假定工事費ヲ240,000圓トシ之ニ對スル増加ハ	20% 8,000	60,000
	操業費	20% 4,000	80,000
	操增(金利(60,000)	總支出	15,000
	業事務所費	請負高	¥ 455,000
	費加本店割掛費	總支出	400,000
		請負高	¥ 55,000
物價勞銀五割騰合	工費支拂額	5% 6,000	¥ 300,000
	六ヶ月後物價勞銀50%騰貴シタリト假定シ残工事費ヲ240,000圓トシ之ニ對スル増加ハ	40% 16,000	120,000
	操業費	30% 6,000	80,000
	操增(金利(120,000)	總支出	28,000
	業事務所費	請負高	¥ 528,000
	費加本店割掛費	總支出	400,000
		請負高	¥ 128,000
物價勞銀十割合	工費支拂額	5% 12,000	¥ 300,000
	六ヶ月後物價勞銀100%騰貴シタリト假定シ残工事費ヲ240,000圓トシ之ニ對スル増加ハ	80% 32,000	240,000
	操業費	50% 10,000	80,000
	操增(金利(240,000)	總支出	54,000
	業事務所費	請負高	¥ 674,000
	費加本店割掛費	總支出	400,000
		請負高	¥ 274,000

負傷或は疾病に對する療養手當等、人に知られざる出費決して鮮少ならず。加之工事中彼等に對する貸出亦常に多し。而して一方資金なるものは、竣工に垂々たる數月前に至つて、漸く回収の端緒を啓き得るものとす。去れば資金回収以前に於ける當業者會計掛の苦心慘憺たる、識る人にして始めて是を知り得るのみ。況んや其後に於ける狀態、亦前來の如き場合おや。然るに何者の早計漢ぞ。請負業者は利益、常に莫大なりとの呼號を敢てする。

物價勞銀の平調なりし戰前に於て、請負ひたる工事にして、戰後の今日に繼續するあらんか、當業者の困難思ふ可さるものありと雖も、既に物價勞銀昂騰せる即今に於て請負ふ處の工事ならんか、時價相當に工費を見積れば足る、何の苦しみかれ有らんとは、吾人亦既に是を唱ふる處、然りと雖も、一面工費の増加は起業者をして、躊躇考案を促がし、自然其數を減殺す、則ち工事を見合さしむる事多し。隨つて營業を萎靡不振に陥らしむるに至る。孰れに見るも、物價勞銀の騰貴たる、必しも一時の現象として自然の調節に待つの、果して策の得たるものなるや否や、聊か疑問に屬す。然らば今や當業者たる者、拱手百年の河清を俟つが如き、迂闊の態度に出づ可き秋に非ず、何等か此際方法を講じ、業務の發展に資せざる可らず吾人をして當業に對し建議を爲さしめんか、當面の急務として盛んに機械を使用す可き事を勧告する者也。而かも本編起稿の精神たるや別に存するものあり、依つて機械に關する具體的説明等は、姑らく後日を期す。

尙ほ終りに臨み當業者の爲に欣ぶ可さは、大起業者たる鐵道院あり、其企畫さるゝ鐵道工事の豊富にして、今後敷設す可く計上されたる線路實に一萬哩、從來の工程能率を以てすれば、少くも二十個年は、當業界を賑はして餘りある事とす。斷じて悲觀を容さずと謂はんよりは、寧ろ進んで大に發奮努力せざる可らず。重ねて一言す、望むらくは速に機械使用を盛ならしめよ、然らば勞銀等の騰貴果して何かある、加之能率の上に於ても労働者を使役するに倍蓰し、從つて起業者の意志に副ふ點に於ても、確に一進歩を劃す可きを信す、躊躇逡巡は決して時勢に順應す可き所以の道に非ざる也。